

## トレーニー派遣(一日目)

3月11日(水)

一日目、いよいよ大連での三泊四日のトレーニー派遣プログラムが始まった。私自身、この派遣への期待と同時に、緊張や不安でいっぱい状態で臨むこととなった。

まず、富山空港ではこのプログラムのご支援いただいた北陸銀行様、共にプログラムに参加する富山大学、富山県立大学と合同で、結団式を行った。大学ごとに代表が決意表明をし、また北陸銀行の皆様から激励のお言葉をいただいたことで、皆の気持ちが引き締まった。



結団式の様子

そして、大連に到着。景観は私の想像とは異なるものであった。どこか田舎めいたのかな雰囲気を感じていたが、実際は空港のすぐそばまで建物が立ち並び、中心部には高いビルが見られた。現地添乗員の方の話より、大連の経済は中国東北地方においてナンバーワンであるということがわかった。また、PM2.5の影響か景色はややかすんでおり、バスから屋外に出るときには研修生の多くがマスクを着用していた。



大連にて

大連到着後、まず北陸銀行大連駐在員事務所長清水様より、中国経済の現状と今後についてお話を伺った。私が興味を持ったことは次の二点である。

一点目は、中国は起業家精神が強いということである。ともに高齢化が進んでいる中国と日本において、日本人は「このままでもなんとかなるだろう」という考え方をもちていることが中国と対照的である。中国経済は着実にのびており、この考え方の違いが今後の大きな差になってしまう。そこから私は、日本の若者がより向上心を持たなければ、今後の日本は中国にますます差をつけられてしまうというのではないかという不安を感じた。

二点目は、大連市と日本の友好関係の強さである。大連市には、日露戦争を背景に日本語習得者が多く、また日本の建造物がたくさんあった。デモが起こった際も、大連市は被害を受けなかったようだ。しかし、日本では中国への敵対意識を持つような報道が多い。私たちはマスコミの偏った情報に左右され、いかに一方的に中国を見ているのかということを知り、現地で実際に見ることの大切さを感じとることができた。



セミナーの様子

夕食会では、大変おいしい中国の東北料理をいただいた。この際、それぞれ自己紹介を行い、皆の目標や参加理由、趣味などを発表し、行員の方々や他大学の学生と交流を深めることができた。この夕食会が多くの人と積極的にコミュニケーションを取るきっかけとなった。徐々に当初感じていた不安も和らぎ、良い緊張感を持って研修に取り組むことができるようになっていった。

初日はあっという間であったが、このトレーニー派遣プログラムでの目標を明確にしたり、多くの人と関わったりする大切な一日となった。

文：  
経済学類 二年 宮本知奈

## トレーニー派遣(二日目)

3月12日(木)

二日目は、大連で勤務している金沢大学 OB の于龍さんと富山大学 OB の劉樹海さんのお話を聞き、その後、三ヶ所の視察を行った。分刻みのスケジュールで非常にめまぐるしかったが、学ぶことがとても多い一日となった。

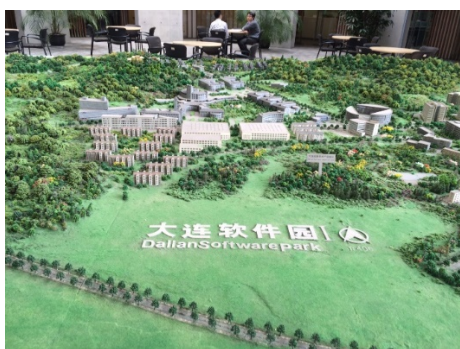
金沢大学 OB の于龍さんが「友好の使者であるみなさん、先入観を捨てて客観的に中国を見ていただきたい。」とおっしゃって、5 分間の動画をみせてくださった。人々の生活や軍の役割など、様々な視点からみた中国の良い面と悪い面を示すような写真が交互に流れるものだった。一番印象に残ったのは、中国の軍隊の写真で、どこかへ兵隊が派遣される重々しい写真と、自然災害から国民を救助している写真である。これを見て、私が中国に今までどれだけの偏見を持っていたか気づかされた。同じ人間なのに、日本のマスメディアなどが作り上げた中国のイメージでしか見ていなかったことをとても恥ずかしく思った。また、富山大学 OB の劉樹海さんは、「今の中国の商売はまだおおらかで、日本のようなもっと細かなサービスを取り入れたい」とおっしゃっていて、もっと経済発展していこう、まだまだ成長するのだという中国の人々の勢いを感じた。

最初視察した大連ソフトウェアパークは、企業の業務委託を受ける IT 企業の集積地である。例えば、ソフトバンクの個人情報の入力、104 番の案内などバックオフィスとしての役割を担う企業がある。個人情報が出ないように、電話番号のみを入力する人など分けていて、情報管理が徹底されているという。

次に訪問したのは㈱イバタインテリア。本社は岐阜県飛騨市にある。この会社は木材を使用して学習机や椅子などを生産する。初めに、社長からお話を聞き、その後、実際に生産している工場を見学した。生産段階によって工場が分けられており、順番に視察した。円安が進む中、経済状況が悪化しており、経営が困難であるという現状を知った。経済状況に伴って日本で製品を生産するのか、海外で生産するメリット、デメリットが大きく変わっていくことを実感した。なぜ大連に会社を設置したのかという質問に対して、一つは大連がほかの都市と比べて近く、親日で日本になじみがあること、もう一つは駐在人を長期的に置くためだという。お話を通して海外に進出する日系企業の厳しさも知ることができた。

三ヶ所目の YKK AP㈱は大連以外にも中国国内にいくつかの拠点がある。窓などの商品を生産する際に気候条件をもとに区分し、要求性能に応じた他社差別化を図っている。窓ひとつをとっても防音、風よけ、デザイン、安全、品質、性能、快適さ、意匠など様々な点を考慮し、一つの窓を作り上げる。その土地のニーズに合わせて生産していくのだ。現地で働く日本人と中国人の双方からお話をしてもらい、私たちの質問に答えていただいた。

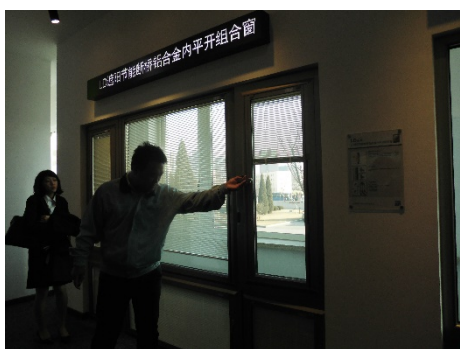
その後は夕食。今日は餃子料理を味わった。水餃子から焼き餃子まで様々な種類の餃子を堪能した。北陸銀行の方や他大学の生徒、先生方と話す機会でもあり、和気あいあいとしたひと時だった。個人的に楽しかった。夕食後、中国雑技団のパフォーマンスを見た。体を張ったものばかりでみんな目をこらして見ていた。内容の濃い一日であった。



大連ソフトウェアパークにて



イバタインテリアでの工場見学



YKK AP(株)での会社の方からの商品の説明



夕食（餃子料理）



中国雑技団のパフォーマンス

文：

人間社会学域 国際学類 2年 小里真輝

人間社会学域 国際学類 1年 飯田陽奈

## トレーニー派遣(三日目)

3月13日(金)

三日目は、大連理工大学の学生との交流会から始まった。一日目、二日目とは異なり、年齢の近い中国の方々とお話出来る機会ということで、私達が非常に楽しみにしていたプログラムだ。初めは言語面で不安もあり、かなり緊張したスタートであったが、手土産や名刺の交換、自己紹介などを進めるうちに親交を深めることが出来た。理工大学の学生の日本語能力の高さに驚くと共に、会話の中で非常に高い学習意欲を感じた。日本の大学の学生と異なり、大部分が寮生活を送り、アルバイトをする習慣はないという。授業後の過ごし方を尋ねると「自習」という回答をいただいた。日本のことに興味を持って積極的に話しかけてくれたおかげで、有意義な時間を過ごすことが出来た。私達が前日の夜に考えた



大連理工大学 交流会 会場

たお礼のパフォーマンスも温かく見守ってくれた。時間が経つのはあっという間で、交流会が終了した後は、理工大学の学生さんと共に、学生食堂へと移動した。お昼時の活気は日本の大学と変わらないが、そのメニューや内装には少し驚いた。食事中も色々な話をして、学内を案内してもらった後、名残を惜しみつつのお別れとなった。短い時間ではあったが、各グループ仲良くなり、寂しい気持ちを感じながらバスへと乗り込

んだ。

午後には旅順視察を行った。私達が訪れたのは 203 高地、東鶏冠山、水師営の三か所である。いずれも日露戦争と関係が深い場所であり、記念碑や銃痕が残る壁、会見所からは当時の戦争の激しさを学ぶことができた。特に 203 高地は日露戦争において最も激しい戦闘が行われた土地であり、当時の戦争で息子を二人亡くした乃木大将は、203 高地を当て字で「爾 (=あなた) 霊 (=魂) 山」(にれいさん) と呼んだという。



203 高地 爾霊山 記念碑

その後、大連のショッピングモールに立ち寄り、各自お土産を見て回る中で大連の人々の活気に触れて、最後に「富山大学・金沢大学合同同窓会」の名目で開催された夕食会に参加した。夕食の席では、現在大連にて活躍されている富山大学・金沢大学のOBの方々と直接お話しする機会があり、中国でのお仕事や生活の事など、各自興味のあることを伺っていると時間はあっという間に過ぎていった。今回の夕食会は、トレーニー派遣プログラムの行程上最後の夜ということでOBの方々、北陸銀行の方々、各大学の先生方から挨拶があり、学生は一人ずつスピーチを行った。スピーチでは今回の派遣を通して学んだこと、感じたこと、反省点、大連の印象などが各自自由に語られ、今回の派遣に対する溢れんばかりの思いが感じられた。その中で学生のスピーチに共通していたのは「今回学んだことをこれからの生活に生かしていきたい」という、未来に対する意欲である。理工大学の方々やOBの方々と交流し、旅順を視察する中で様々な刺激を受けただけでなく、その刺激を今後どう活用させていくのかを考えさせられたトレーニー派遣三日目であった。



三大学合同懇親会

文：

人文学類二年 館野友里

人文学類二年 二口則子